

「英語×AI」最終成果報告会

2月3日に「英語教育強化事業」の採択団体による最終報告会へ参加しました。46採択団体がそれぞれの実践報告を行い、成果や課題についてグループで共有しました。本市も「ELSA」についての成果報告をしました。以下が発表内容の要約です。

【実践報告】AIと教師の役割分担が拓く英語教育の新展開

——個別最適な学びを「話せる自信」へとつなげる授業デザイン——

高知県須崎市教育委員会では、生徒の英語発信に対する「自信」と「話す力」の育成を目指し、AI技術を核とした英語教育強化事業を推進している。

本事業では、市内中学校2校の全生徒を対象に、AI英会話アプリ「ELSA for schools」を導入。

単なるツールの導入に留まらず、AIによる個別練習と教師による緻密な授業設計を組み合わせることで、生徒の心理的障壁を打破し、能動的な学習態度を引き出すことに注力した。

AI活用の大きな特長は、即時的なフィードバックと学習データの可視化にある。精緻な音声分析に基づく音読指導や、CEFRに準拠したスピーチ分析により、生徒は自立的に反復練習を重ねることが可能となった。

一方で、教師はAIから得られるデータを活用して生徒個々の課題を的確に把握し、授業での効果的な指導や進捗管理に役立てている。

ここで重要なのは、AIを単なる評価者とするのではなく、教師が「評価を再定義する翻訳者」として介在することである。

AIの厳しい評価によって生徒が自信を失わないよう、教師が目的意識を支える価値付けを行うことで、AIと教師の「ベストミックス」を図る授業スタイルを構築した。

この実践は、生徒の意識と能力の両面に顕著な変容をもたらしている。検証結果によると、CEFR A1レベル相当の割合は半年間で14ポイント上昇し、確かな語学力の向上が確認された。

心理面においても、「英語を話すことへの自信」が向上する一方で、「話すことへの緊張」は16%減少しており、間違いを恐れず、ためらわずに話そうとするマインドセットが育まれている。

こうした変化は校外の活動にも波及し、市内の英語弁論大会への積極的な挑戦や県大会進出といった具体的な実績にも繋がっている。

また、本事業の特筆すべき点は、一部のモデル校に限定せず、市内全英語教員を「AI英語活用リーダー」と位置づけて組織的な底上げを図ったことにある。

少人数編成の学校が多い地域特性を踏まえ、教員同士がAI活用法や授業構成を共有できるコミュニティを形成しながら全市一斉の授業改善が加速した。

今後の課題は、AIによる個別練習で得た知識や技能を、いかに対人コミュニケーションという「生きた学び」へと循環させるかである。

AIを単なる道具として終わらせず、単元目標の達成に向けた高度な授業デザイン力が教師には求められている。

生徒が「習得した内容を他者に伝えたい」と心から思えるよう、今後も意欲的なアウトプットの場を創出し、AI活用が育む新しい学びの形を追求していく。

